

○二〇一四年度中国文学学会 大会シンポジウム
漢詩教材としての杜甫の詩

司会・コーディネータ 北海道教育大学 大橋 賢一
発言者 北海道教育大学 後藤 秋正
長野県短期大学 谷口 真由実

北海道旭川東高等学校 大村 勅夫

シンポジウム「漢詩教材としての杜甫の詩」について

大橋 賢一

本学会では、ここ三年間、漢文教育に関するシンポジウムを連続して開催してきた。二〇一一年、於聖徳大学は、思想分野の教材として『老子』（『老子』を高校・大学の教室でどう読むか）を、二〇一二年、於京都教育大学は、歴史分野の教材として『史記』（『教材としての『史記』』）を取り上げた。

二〇一三年、於埼玉大学では、小・中・高等学校の国語教材における漢文教材を概観しながら、教材としての漢文の位置づけを確認しつつ、そのあり方の方向性について考えた（「古典教育のなかの漢文学」）。ただ、その際に



は漢詩漢文教材を概観することに主眼があつて、古典文学分野の教材について、集中的な議論はしていなかった。そこで、今年度は主に杜甫の詩を取り上げ、古典文学分野の教材としての可能性、及びその魅力などについて研究、及び教育の両面から考えることとした。

本学会には、近年、杜甫研究を精力的に進めている後藤秋正・谷口真由実両会員がおり、

それぞれの立場から杜甫の詩について論じていただいた。また、高等学校の現場において、どのように杜甫の詩を取り上げているのかについて、北海道旭川東高等学校の大村勅夫^{とよお}教諭をお招きし、現場での生徒の反応などをご紹介いただいた。

近年、杜詩の用語について研究を進めている後藤会員は「春望」の領聯に関する解釈のゆれについて詳細に論じ、谷口会員は、杜甫が当時の政治について、明確なビジョンを持っていたことを裏付け、三更三別にはそうした杜甫の

思いが反映されていることを論じた。大村教諭は「春望」と「絶句」が中学校でも教材として取り上げられていることを踏まえ、高等学校では対句や典故に関連する授業を行うことが効果的であることを報告した。大村教諭は漢文を専門としない高等学校の教諭であつて、昨今このような国語教師が多くを占めていることから、本学会員にとつて、有意義な現場における問題が示されたと思う。

また京都教育大学でのシンポジウムと同じく、今回も本学卒業生を中心に、道内の中学校、高等学校の国語科教諭、大学院生、学部生、十数名が参加し、道内における教育関係者の漢文教育に関わる知見を広めることができた。

ただ、司会の不手際により、パネリストの発表が大幅に超過したため、討論の時間が非常に限られてしまった。また、大村教諭は現場で役立てられるような工夫について、大会参加者に質問したが、時間が不足し多くの提案を得られなかったことは、司会者として反省している。しかし、総じて言えば、各パネリストの報告は非常に示唆に富むものであり、杜甫の詩に関する研究・教育の両面において極めて有意義なシンポジウムであつたと感じている。

(北海道教育大学)

杜甫の詩をどう読むか―「春望」の領聯

後藤 秋正

「春望」を掲載しない中学・高校の国語教科書はあるまい。漢詩を知っているかと問われて「国破れて山河在り」の句が口をついて出てくる人も多いはずである。だからといって人口に膾炙しているこの詩の解釈が一定しているわけではないこともまた周知の事実である。

冒頭の「国」の解釈ですら、国家の意ととるか、国都・長安の意ととるかに分かれるし、「三月に連なる」も、火急を告げる烽火が晩春の三月になつても止むことがないととるか、昨年の三月から今年の三月まで、あるいは三か月もしくは長い期間続いているととるかに分かれている。さらに「万金」にも値する「家書」は、一度くらは手許に届いたのか、一度も届いたことはないのか、といったことでも解釈は分かれるかもしれない。これは鳳翔の行在所から鄭州の家族のもとへ安否を問ひ合わせ、その返信を得るまでは届くことがなかったと考えるのが妥当だろうが。

そして何よりも「感時花濺淚、恨別鳥驚心」と詠じられる領聯の、「涙を濺ぐ」「心を驚かす」の主語(主体)は杜甫なのか、それとも「花」と「鳥」なのかという問題があ

る。杜甫を主語と見なす論者は日本・中国を問わず枚挙に暇がない。これが擬人法であつて「花」と「鳥」が主語であると思はす論者は少数派に属するように見受けられるが、その代表者と目されたのは吉川幸次郎（『新唐詩選』岩波新書、一九五二など）であろう。つまり領聯は大きく二つの解釈に分かれるというのがこれまでの認識であつた。ここに加わつたのが川合康三「杜甫」（『岩波新書』二〇一一）であり、「花にも」「鳥にも」と読むいっぽうで、「主体は詩の発語者ともとれるし、花や鳥ともとれる」のであつて、「発語者と花・鳥とが主客混淆した関係の中で自他の区別が消滅」していると述べている。この解釈が最も新しいものだろうが、領聯の読み、つまり解釈はこれら三者に限定されるわけではない。「時に感じては花に涙をそゞぎ、別れを恨みては鳥も心を驚かす」（傍線筆者）と読んで、第四句のみを擬人法と捉えた、小杉放庵（未醒）『唐詩及唐詩人』（書物展望社、一九三九）の例もある。さらに、従来知られていた『鶴林玉露』や謡曲「俊寛」といった資料のほかに、江戸中期の人、高橋（簑笠庵）梨一『奥細道菅孤抄』（一七七八刊）、中里介山『漢詩提唱（杜甫）』（隣人友社、一九三七）など、いずれも領聯を擬人法と見なしていることが知られる。

詳細に検討を加えるならば、領聯の読みや解釈に限つてみてもより多くの資料が見出されるだろう。時間が慢性的に不足している中学・高校の授業においては無理な望みかもしれないが、教科書の脚注などに頼つて事足りるのでなく、よく知られた漢詩であつても、その解釈には先人たちの長期間にわたるさまざまな試みがあつたことを生徒たちに伝えてもらいたいものだ。またそうすることが、とかく漢詩・漢文を敬遠しがちな生徒たちの関心を喚起することにも繋がっていくのではないだろうか。

（北海道教育大学）

杜詩の社会性について—安史の乱下での詩を中心に—

谷口 真由実

盛唐の詩人杜甫（七一―七七〇）は、当時の社会状況をリアルに描いたことから、社会詩人と評され、またその詩は詩によって描かれた歴史として「詩史」と称される。杜甫が安祿山の乱勃発後に制作した「三吏三別」、「北征」などの詩には、当時の社会状況が具体的に描写され、また、当時の政治・政策についての言及がみられる。

安史の乱が勃発すると、盛唐に生きた詩人たちと同様杜

甫も否応なく戦乱の渦に巻き込まれていった。至徳元載（七五六）新たに即位した肅宗のもとに駆けつけようとして賊軍に捉えられ長安に軟禁された（「春望」はこの間の制作）が、翌年賊軍中から脱出、肅宗の行在所に達して左拾遺を授けられた。しかし、直後に宰相房琯を弁護した罪で三司の推問を受け、幸い罪は許されたものの、乾元元年（七五八）六月に房琯一派として華州に左遷されるに至った。この一連の事件を「房琯事件」という。房琯は〈諸王分鎮〉〈専守防衛〉〈民生の安定〉を主唱し、一方、肅宗は諸王の協力を望まず、単独勝利をめざし、〈積極攻勢〉〈増税〉〈徴兵〉政策を推し進めていた。杜甫が房琯の戦争収拾策に共感を抱いていたこと、それが房琯を弁護した背景であり、また肅宗との間に軋轢を生じた理由であったと考えられる。

左遷の翌年（乾元二年）春、華州司功参軍在任中に制作されたのが、杜甫の社会批判詩の代表作「三吏三別」である。華州から洛陽へ赴いての復路の旅で、杜甫が目にした情景は、まさに肅宗らによる〈積極攻勢〉〈増税〉〈徴兵〉を推進したことによる民衆の生活の疲弊であった。この六首の連作は、「三吏」と「三別」に分けられる。「三吏」、すなわち「新安吏」「潼関吏」「石壕吏」では、杜甫と等身

大の語り手が登場し、吏（役人）との会話や民衆の言葉を通じて、民衆の置かれている悲惨な状況を浮き彫りにしている。特に相州（鄴城）での官軍敗退後の東都洛陽の守備やそれに備える急な徴兵の問題が取り上げられている。一方「三別」、すなわち「新婚別」「垂老別」「無家別」では、民衆が主人公として登場し、民衆自身が独白によって主体的に戦乱下の生活の崩壊、特に過酷な徴兵によってもたらされた悲惨な現状を語っている。

杜甫が華州司功参軍在任中、「三吏三別」に先立ち作成した「乾元元年華州試進士策問五首」は、通常の策問とは異なり、当時の具体的な政治政策に関する問題意識―賦税の問題、（追加増税策）、貨幣改鑄（乾元元年七月の乾元重宝の鑄造）など―を受験者に問うものである。現在の政治・政策への一貫した批判的視点が、この策問において鋭い問題提起として提出されており、この問題意識は、その後制作された「三吏三別」の制作動機に連なると考えられる。

杜甫は安史の乱を挟んだ激動の時代に生きたが、その時代の政治、社会に対する現実レベルでの杜甫の社会認識における峻厳さが、その文学における問題意識と不即不離の関係にあることが確認できた。従来杜甫は現実認識に疎い

と評価されてきたが、特に「乾元元年華州試進士策問五首」からは、杜甫が極めて高い政治的見識と具体的政策を保持していたこと、安史の乱下という極限状況の中で、民衆の生活を守りつつ内乱を収束するという困難な課題を達成するために、現実的な政治・軍事方針を提出していたことがうかがわれる。そして、そのような問題意識を根底として杜甫の社会詩の原点ともいえる「三吏三別」は誕生したのであった。

(長野県短期大学)

漢詩教材としての杜甫の詩―「春望」「絶句」を授業する―

大村 勅夫

国研(二〇〇六)「平成十七年度高等学校教育課程実施状況調査」の結果は、高校国語の指導について大きな示唆を与えている。それは、「漢文が好きだ」に対しては71・2%が否定的な回答をしているというものである。非常に厳しく、高校教員にとつての大きな課題である。

この回答結果の要因はいくつかあるだろうが、そのなかにも、高校国語教員自体にも、漢文を学んできた者・授業で扱える者がさほど多くはないというものがあるのではない

か、と考える。よって、漢文指導を苦手と感じている教員でも扱えるような単元の開発が必要である。その一つとして、校種共通教材を活用した単元を提案する。校種共通教材の利点は、その教材や文章を一から扱わなくてよい、すなわち、前校種においての学びを先行オーガナイザとして扱えることにある。

ここでは、校種共通教材として「春望」「絶句」を教材とした高校単元を提案する。学習指導要領に「伝統的な言語文化」の事項が明記された結果、中学校・高等学校ばかりではなく、小学校教科書にも漢詩が載るようになった。その一つが「春望」である。

校種共通教材を扱う際、前校種での学習内容を踏まえた、あるいは、超えたものとしたい。そのため、前校種での展開を認識・想定する必要がある。漢詩に関しては、例えば、東京書籍の中学校教科書では、「詩の構成や、対句などの特徴的な表現に着目しよう」とあるが、対句そのものがどんなものであるとの記述はない。光村図書には、「対句とは、形や意味の似ている二つの句を並べる表現技法」とあり、律詩についての言及もある。ただし、絶句についてはない。よって、これらのことを補強することを高校では行いたい。そうすることで、漢文が国語に寄与する実感を与



えることができる。と考える。

中高共通教材に考察を加えた先行研究として、大橋（二〇〇八）^{*}を挙げる。大橋は、リズム・音節数、押韻、対句への注目や、典故表現を示すことを提案している。深い読解へ向けた関心の高まりをねらいとしたものである。この提案をもとに、文構造への注目や理解の手立ての一つとして対句や典故表現を教示することによって、学習者の漢文への意欲喚起を図った単元を実践を通して考察する。実践後のアンケートより、次の回答を掲載する。

「述語を見つけるときには対句を利用することや、対句を使うことによる効果を知ることができました。中学校で習った意味とは少し違って、品詞などの位置が同じになるのは知りませんでした。また、典故表現では文のニュアンスなどが分かるので内容をより深く読み取ることができ

のでこれから意識して読んでみたいです。また、典故表現を見つげるためにもいろいろな漢文を読むことが大切だと思いました。」

この回答から、学習者は、対句や典故表現が漢詩解釈に向けて価値あるものだと思えたことがわかる。また、多様な漢文を読むことの必要を感じるなど意欲にも影響があったことがわかる。つまり、この単元により、漢文学習への意欲喚起や読む視点の獲得がなされたと捉えることができる。

*大橋賢一「中高共通教材としての杜甫「春望」の指導法について」〔国語教室〕第八十八号、大修館書店、二〇〇八年

（北海道旭川東高等学校）